「木曽地域の高校の将来像についての意見・提案書（素案）」についての意見募集の結果及び対応について

木曽地域の高校の将来像を考える協議会

１　募集期間

令和2年8月20日　～　令和2年9月18日

２　募集結果

提出者数　9件

◇「はじめに」について　　P．2

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	危機意識が足りない文章。生徒がさらに郡外に流出し青峰高校の存立基盤を危うくしていることが伝わってこない。	ご意見として伺いました。

1　木曽地域の高校の状況について

◇(1)経過　　P．3

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	「全国的にみてもユニークな普職併設」という表現は間違い。小さな地域の高校は単純に普職併設と割り切っては言えない。ユニークという表現は都市部の教育環境からみればという視点である。	「普職併設」の高校が数少ないことは確かであると考えますが、ご意見にあるように「ユニーク」という表現には誤解を招く部分もあるかと思います。定時制へのご意見も含め、7行目以降を以下のように変更します。 「２度の統合を経て、普通科、理数科、森林環境科、インテリア科の４科をもつ<u>普職併設の全日制となった。また、木曽東高校時代の昭和２３年に開設された定時制普通科も存続し、統合から１４年目を迎えている。</u>」　（アンダーライン部が変更）
2	定時制の存続については非常に重要なことです。もっと強調されてよい。	
3	９行目から１３行目は、あまりにも雑駁なとらえ方であり問題がある。事態を正しく判断・理解するために木曽青峰高校成立後の木曽郡の中学生の進路希望調査と木曽２高校のクラス数変遷の資料を。	ここでは、各高校の現在に至るまでの大まかな流れのみについて触れています。 郡内中学生の進路希望調査と進学状況については、過去４年間の資料を追加します。
4	２１行目以降について、蘇南高校の総合学科の設置は地域の要望ではなく当時の校長の独断ですすめられた。地元の人々がなかなか総合学科を理解できない理由の第一の原因はそこにある。過疎地域における総合学科の在り方について研究不足だった。	蘇南高校の総合学科設置は、将来に亘って高校を存続してほしいという地域の強い期待に応えるために取り組まれたものです。総合学科設置から１０年が経過する中、高校の不断の努力により、地域に期待され、生徒の進路選択にも柔軟に対応できる現在の姿に繋がっているものと考えています。

◇(3)中学生の高校進学状況　　P．4

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	3年分のデータの対象年度が少なすぎるため、客観的な判断をするデータとなりえない。少なくとも10年間のデータが必要。	資料については、現時点での入学状況が客観的に把握できるものとして３年間の状況を載せました。資料が多くなりすぎることは避けたいと考えますが、昨年度分を追加し、４年間のデータとします。
2	ここ3年間だけの統計でも、郡内生徒の郡外流出が急増している。青峰高校については普通科理数科を合わせた生徒の急減が大問題。木曽郡内にしっかりとした高校を作り“木曽の子供たちは木曽で育てる”という目標を掲げた青峰高校が、普通科理数科を目指す生徒からそっぽを向かれ始めた。統合当初の青峰高校は、地域の高校でも魅力を保持し、できるだけ生徒流出が起こらないようにするために科のバランスに慎重な配慮をしてきた。普通科・理数科など都市部の進学校に対抗できる科や、森林木工など地域の伝統的な工芸を学べる科などを適正なバランスで配置し魅力を出すことに努めていた。	郡外流出の状況につては、ここ３年間の流出理由の調査をみても、ご意見いただいた状況はあると考えます。今回、資料は提示していませんが、考察のところでそのまとめについては触れさせていただきました。 中学生の進路希望について、第１回進路希望調査から最終志願に至る過程において、普通科志願者が職業科及び他郡市に志願変更している可能性については承知しております。過去４年間の第１回進路希望調査と最終入学者数を比較した資料を追加します。
3	郡外生徒の流入に触れていない。どのような生徒がどのような目的で郡内に入ってきているのかきちんと記述するべき。都市部で居場所を失った生徒の避難場所（寮を含め）にされてしまった面があった。そのことには一切触れられていない。	流入生徒の状況については個々の調査をしておりません。ご意見のような状況ばかりではなく、積極的に郡内の高校に来ている生徒もいると認識しています。

◇(5)高校の入学状況　　P. 6

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	（ここも）統計の年度が3年間だけというのは、大変な不備。中学三年生の各年度の入試志望調査の変化の動向を見る資料がないのでどうしてもこのような浅い見解になってしまう。	ここでも資料が増えすぎることには注意したいと考えますが、入学状況については本年度分を追加し4年間のデータとします。 中学生の進路希望について、第１回進路希望調査から最終志願に至る過程において、普通科志願者が職業科及び他郡市に志願変更している可能性については承知しております。過去４年間の第１回進路希望調査と最終入学者数を比較した資料を追加します。
2	長野県下の他地域では、最も募集人数が多く受験人数が多いのが普通科。普通科に入ることがこれほど制限され難しくなっている地区は木曽のみ。	

◇(7)中学卒業者数の推計　　P. 9

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	「なっていくと予測される」という表現はもっと強い表現に変えなければいけない。予測ではなくほぼ現実であるから。	３行目については、ご意見のような状況はありますが、断定はできませんので修正は難しいと考えます。

◇(8)高校の現状と課題について　　P. 9

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	「２課程４学科という多様性が特色となっている」という記述は極めて表面的なとらえ方。県下では極めて少なく特色であると同時に、極めて偏った職業科ということができる。木曽北部の一校しかない高校のクラス数の半分が林業木工というバランスは、特色を通り越して「ゆがみ」になっている。	①本文３行目の表現について、「特色」ではなく「歪み」ととらえられていますが、ご意見にも書いていただいた通り、県下及び全国的に見ても「特色」であることは間違いではありませんので、表現としては的確と考えております。
2	（職業科の）「全国募集」は飛躍しすぎた根拠に欠けた安易な発想。	旧山林高校時代から全国的にも特色のある学校であったことは確かであり、今もその特色を残していますので安易な発想というとらえはしていません。
3	統合当時の青峰高校では東大・京大から看護学校・専門学校・就職まで対応しており、都市部ではこんなすごい学校はないというのが、外部から見た当時の青峰高校であった。今全国で高校を立て直そうとしている地域からみれば統合当時の青峰高校の在り方がまさに目標である。木曽郡に生活している生徒をまず大切にし伸ばしていくことが青峰高校の地域における使命である。	「今、木曽に生活している生徒をまず大切に伸ばしていくこと」については、協議会としても同様の思いです。

◇(9)県教育委員会実施方針より　　P. 10

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	新型コロナウイルスによって、学校教育のあり方が、国際的に大きな変化を見せた。次の視点で改革を見直すことを提案する。・デジタル技術による障害にあった教育環境の提供。・同一環境同一授業の提供による、夜間、通信制生徒との差別化解消。・県内外の学校、学科を自由に選択できるオンライン学習環境の提供など。 統合又は２校の議論から脱却し、新しい生活様式と社会情勢に見合った、自由で国際色溢れる教育現場への変貌に舵をきるべき。	いただいたご意見については、将来検討される可能性があると考えます。今回の協議会においては「新しい生活様式」を想定しての議論は行ってきておりませんので、提案において詳細について触れることはできませんが、２（２）⑥に以下の文を追加させていただきます。 「また、ＩＣＴ機器、Ｗｉ-Ｆｉ環境のより一層の充実が望まれる。<u>このことが障がい等がある生徒への支援や定時制の学びの充実のためにも活用されることが大切である。</u>」（アンダーライン部挿入）

2　木曽地域の高校の将来像に向けた意見・提案

◇(1)木曽地域に望まれる「学びのあり方」について　　P. 11～12

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	（1）前文にかかわって、 ・インテリア科2年次において就業体験を５日間実施している。これを有償化して、働くことで報酬を得られる喜びと、企業は責任を持ってその技術等を教えることができる環境を作る。カリキュラム的には３年間で２社以上の職場を経験する。 ②⑤及び（2）⑤にかかわって、 ・県で進めているSDGsフォレストバレー構想を進める。 ・木曽でしかできないオンリーワン教育を維持発展させる。 ・インテリア科で製作基礎技術を修得し、上松技専で高度な技術を身につけ、郡内に工場を誘致し雇用を生み出す。 ・木曽で伝統産業を継承してくれる人材を発掘する。 ・専門科より国公立大学進学者を毎年1名以上合格させる。	いくつかの具体的ご意見をいただきましたが、学びの具体まで今回の協議会で審議、提案することは難しいと考えています。協議会の提案が認められた中で、各学校が教育課程を編成する際に、いただいたご意見についても検討されることになると考えます。
2	①について、インテリア科、森林環境科は現状のまま存続することが望ましい。	インテリア科、森林環境科の存続については大切に考えています。　２（1）①の提案は、職業科に限定した提案ではなく、木曽地域の高校教育全体についての提案として考えています。
3	①の育んで欲しい能力について、コミュニケーション能力は当然だが、「深い思考力」と「自分の力で判断する能力」も必要かと思う。	提案いただいた「思考力」「判断力」についても、今、大事にされている学びの視点ですので、以下の文を追加します。 「生徒が高校卒業後に地域・日本・世界で活躍するためのコミュニケーション能力<u>及び深い思考力と判断力を</u>育んでいく。」（アンダーライン部追加）
4	②について、林業大学校や上松技術専門校との連携をうたっているが、現実的にみて無理がある。上松技術専門学校と青峰インテリア科も同じようなことが言える。生徒の現実を無視した発言があまりに多いことに憤りを感じる。	ここでの提案は進学先としての連携だけを言っているのではなく、教育活動全般における連携を言っています。
5	②について、インテリア科、森林環境科の活動をより強く発信すると同時に、普通科、理数科においては地域に向けたどのような活動を行っていくのか明確な道筋を示してから検討する必要がある。	それぞれの学科における地域連携の具体については、各学校の教育課程の中で検討していく内容になると考えます。本提言では、新たな学びの方向として地域との連携を図ることが重要になってくることを述べています。
6	④について、大学進学を希望する生徒、保護者の意向により郡外の高校へ進学することは各々の価値感があるため致し方がない。普通科、理数科重視の木曽青峰は、結果的に木曽地域の少子化、過疎化を促進しているようなものでとても危険だと感じる。	進学先を選択するのは生徒及び保護者の意向であることは当然です。その進路選択の際に、できるかぎり居住地に近い環境で進路実現を図ることができるように環境をととのえることは、学校設置者の責務と考えます。④はそのための要望です。
7	大学進学のための力量を青峰普通科や理数科は保持していた。それを現在壊しつつあるというのが正しい捉え方。進学を目指す普通科・理数科の生徒の比重をどんどん少なくしてきたことが有名大学への進学率も低下させる原因となっている。	この提案書は誰がこのような状況をつくったのか問題にする場ではないと考えています。④の要望はいただいたご意見とも一致しており、大事な部分と考えています。３行目に以下の文言を追加します。 「学びの場の<u>一層の</u>充実を」（アンダーライン部追加）

8	⑤について、二つの学科のどちらか一方をないがしろにしているように受け取れる文章はとても違和感に思う。	専門学科とは、インテリア科、森林環境科を指しています。インテリア科も県内では一つしかなく、全国的にも特徴のある学科であると考えます。二つの学科のどちらかをないがしろにしているというものではありません。なお、後段「また」以降を以下のように改めます。 「また、そのような教育を充実するため、専門知識のある教員の配置は欠かせない。」（アンダーライン部修正）
9	⑤の部分は極端な言い方をするならば現実を知らない夢想家の文ということができる。今ころ林業部門の職員がいない専門の職員を採用せよなどということがあるのか。山林から青峰に移る時に林業科から森林環境科に名称を変え、森林科については学力の底上げとバイオテクノロジーなどの先端技術の入り口に立てるようにと設備も考えた。測量の大会で山林高校の名前が途絶えてどのくらいたつのだろうか。	⑤については、目指す方向を示すことは大切と考えております。また、ご指摘のとおり旧木曽山林高校時代には全国的に名をはせた時代があること、木曽青峰高校統合時にはバイオテクノロジーなど先端技術の入り口に立てるための設備を整えた実績もあることなどから、今一度「学びのあり方」を見直すことは必要なことであろうと考えます。終わり２行の表現については以下のように改めます。 「また、そのような教育を充実するため、専門知識のある教員の配置は欠かせない。」（アンダーライン部修正）

◇(2)木曽地域の魅力ある「高校の姿」について　　P. 12～14

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	（2）の部分、「地域一丸となって魅力ある高校づくり」と書かれているが、これがどれだけ難しいことであるか。	ご指摘のとおり難しいことと考えます。しかし、多くの方が必要性を感じていることであり、地域も協力していくという姿勢を示すことは大切なことと考えます。
2	①について、２校存続が条件であるが、木曽青峰地に１校にするべき。	２校存続は、協議会としての大切な要望であると考えています。
3	①について、2校の存続は絶対条件と書かれているが、絶対などとは言い切れない。なぜ二校として存続できるのかきちんと学校の制度や財政や設備や人的配置から述べるべき。	①も含め、これは地域協議会としての要望書であり、協議会において出された地域としての願いを伝えることは当然のことと考えます。
4	②について、少人数学級編制は、コロナのこともあり３０人以下学級を文科省が整備すべき。国がダメなら県独自で行うべき。県もダメなら木曽郡として普通科理数科枠３人、専門科技術員も含め２人を補う予算付けをする。	２校存続のためにも少人数学級編制は大事なポイントになると考えます。 なお、県立高校の学級編制は設置者である県が実施するものと認識しており、郡が実施することは難しいと考えます。
5	②について、すでに十数年前から少人数学級を先行的に実施してほしいと県教委に陳情してきた。ずいぶん遅くなって手遅れの感はあるが、頑張ってください。	②③④の提案については、応援をいただいたものと解釈いたしました。必要な要望であると考えています。
6	③について、普職比については、私も県教委に機会あるごとに申し上げてきた。	
7	④について、今頃になってこんなことをと思うが、残念でたまりません。何もかもが木曽の実態と10年遅れで進んでいる感じである。	
8	③について、全県に合わせる必要は無い。５：５も特色の一つと考える。	普職の比率については、必ずしも全県に合わせる必要はないと考えますが、毎年の第１回進路希望調査では、郡内においても普通科志望者が最も多くなっています。また、郡内の入学者については職業科の定員割れという事実もあるため、生徒のニーズに合わせた募集定員にすることが自然の流れと考えています。

9	③⑤については、正反対のことが述べられておりどちらを重要視していきたいのか全く分からない。他の高校と同じ普通科教育重視の教育、いわば競争率の高い分野への参入は木曽青峰高校の今後、また木曽地域の今後を考えると極めて危険。木曽地域の高校二校を存続するには、県内の他の高校とは異なる教育であるインテリア科、森林環境科を現状のまま存続し、他の高校との差別化が不可欠である。	郡内の中学卒業者の第１回進路希望調査結果では、普通科志望者が多いのが現状です。提案は、木曽に育った子どもたちが、地元でそれぞれの進路実現を図れるようにしてあげたいというのが一番の趣旨であり、協議会で大切にされた部分です。それを提案したのが２（２）③、④になります。関連して、上記の第１回進路希望調査では、専門学科志望者は定員を大きく下回った状況があります。また、最終的な入学者数も定員割れをしています。木曽青峰高校の活性化を図るためには、伝統ある専門学科のさらなる充実をはかることも大切な内容となります。それを提案したのが２（１）⑤になります。③⑤の提案は、正反対のこととは考えておりません。 理数科、普通科の学びについては、２（１）①～④に述べた提案が具体の方向となります。さらなる具体については、各学校のカリキュラム作成の中で検討されることと考えます。
10	特色ある専門学科を構築しても、募集定員数が少なく定員オーバーした場合、結局集まらないのではないか。又、理数科にも言えることだが、普通科の今後の授業内容の方向性や学びの場の充実とは具体的にどのような内容なのか明記されておらず、ただ募集定員を増やしたところで、学生が「この学校の普通科に進学しよう」と思えるのか疑問であるのと同時に、どのように考えているのか記載が欲しい。	
11	⑤について、まず今いる木曽の生徒を大事にすること。木曽の高校を再興するには、この一点。郡外県外などの生徒を当てにするのではなく、青峰高校は木曽の子供たちを育てるための高校であってほしい。	旧山林高校時代から全国募集を行い、県内外からの生徒を寮で受け入れてきました。
12	⑥について、学習環境の整備を図る際、「生徒の力」を活用することは大変すばらしいこと。（１）木曽地域に望まれる「学びの在り方について」で記述されている「探求的な学び」にも資することなので、そのこともこの項目で触れておくと良いかと思う。	（２）は高校の姿についての提言ですので、⑥の原文でよいかと考えますが、ご意見の部分についてはその通りですので、以下の文を追加します。 「学校環境整備に生徒が主体的に関れることを考えたい。<u>このことは、探究的な学びの実践の場ともなる。</u>」　（アンダーライン部追加）
13	⑧の部活動について、合同で活動することを基本にするのは、交通費、移動時間等を考えると厳しいのではと感じ、打開案を考える必要がある。	ご意見の通り難しさはあると考えます。しかし、単独ではチームをつくれない部活動も出てきています。毎日の練習をすべて一緒にできなくても合同チームをつくることは可能であり、今後はそのような柔軟な対応をしていくことが子どもたちのためには必要であると考えます。可能な限り、生徒がやりたいスポーツをできるようにしてあげたいというのが一番の趣旨です。
14	⑧の部分について、部活動はオール木曽というならば、高校もオール木曽でもよいのではないかということは当然ある。部活だけオール木曽と叫ぶのは不自然。	⑧について、学習はそれぞれの学校の努力で充実させられますが、部活動についてはそれぞれの学校の努力だけでは充実させられない状況になっているのが実情です。「オール木曽」という表現が適切でない部分もありますので、以下の文章に改めます。 「部活動については、２校が連携し合同で活動することも<u>取り入れ、合同チームでの大会参加を</u>検討していく必要がある。」（アンダーライン部変更）

◇「おわりに」について　　P. 15

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	ここにきて深刻な影響を与えているコロナ禍にあっては「新たな学び」を見直す必要が出ているのではないか。提案書の検討過程ではコロナ禍における高等教育の在り方の検討ができていないと思われるが、立ち止まって改革の再検討を行うべきと考えるので、あとがきへの文書の追加を要望。	今回の協議会においてはコロナ禍を想定しての議論は行ってきておりませんので詳細について触れることはできませんが、２（２）②の要望については、感染症の対策にも生きてくるものと考えます。

◇提案書全体について

NO	意見の概要	協議会の考え方
1	住民や関係者の思いを的確にまとめ、将来に向けての展望を示しており、こうした思いが改革にきちんと反映されることを望んでやまない。	協議会としても同様に考えております。
2	木曽の産業や文化についてより深く認識し理解してもらうべく努力してゆく必要が、この地域に住む大人達にもあると考える。今後、この地域でどのような夢を持つことができるのか子供達と意見を交換できるような場も必要。地元に帰ってきてもらえる地域になってゆかなければならないと思う。	地域への大切な呼びかけをしていただいたと考えます。２（１）及び（２）の前文へ反映させていただきます。 ２（１）。「そのために生徒が地域の産業や文化を深く学ぶとともに地域の課題や魅力を発見し、」 ２（２）。「高校までは地元で過ごし、その後も自ら選択して地元に残ることや、いったん地元を離れても将来的にもどってくることが欠かせないことであり、」（アンダーライン部挿入）
3	少しでも多くの生徒に入学してもらうには環境づくりが必要。中学生（親も含む）に木曽の高校の魅力や授業内容の説明を中学２・３年生を中心に年数回行ってはどうか。実習機械も時代にあった設備とし、卒業後戦力となる人材を育てる環境づくりが急務。卒業時に社会人となる自覚とマナーを合わせて会得させ、送り出せる学校に。計算能力は身につけて卒業させる授業も。郡外からの募集も積極的に行い、宿泊施設など環境を整えることが大切。	これから木曽の高校がしっかりと取り組んでいかなければならないことについてご示唆をいただきました。２（２）⑦へ以下の文を追加させていただきます。 「生徒の活動状況等について知る機会を多面的に提供するとともに、」（アンダーライン部挿入）